

令和4年度  
「学校関係者評価」報告書

令和5年3月  
学校法人 新潟高度情報学園  
新潟こども医療専門学校

学校法人新潟高度情報学園 新潟こども医療専門学校自己点検・自己評価委員会「学校関係者評価」専門委員会は、令和4年度自己点検・自己評価報告書に基づいて学校関係者評価を実施し、以下の通り報告いたします。

### 1. 学校関係者評価専門委員会委員名簿

氏 名	所 属
林 正海	はやし社会福祉士事務所 代表
田村 知子	済生会新潟病院 事務部 医事課 係長

### 2. 参加者

学校評価委員

林 正海 (はやし社会福祉士事務所 代表)

田村 知子 (済生会新潟病院 事務部 医事課 係長)

学校側参加者 (事務局)

小見 英晴 (新潟こども医療専門学校 学校長)

横堀 正浩 (新潟こども医療専門学校 副校長)

石川 美穂 (新潟こども医療専門学校 教務部長代理)

板垣 裕 (新潟こども医療専門学校 教務課長)

本田 拓也 (新潟こども医療専門学校 就職支援課長)

小熊 亜沙子 (新潟こども医療専門学校 医療事務総合学科主任)

### 3. 基準項目ごとの学校関係者評価・意見

項 目	評価・意見・質問等
基準1 教育理念・目的・ 育成人材像等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーションなどで学生に教育理念を伝える機会はあるのか。</li> <li>→年度始めのオリエンテーションで伝えている。保護者には成績評価等の文書で渡しているが、教育理念の理解までは難しい。職員は年度始めの全体会議で教育理念の確認を行っている。</li> <li>・学生の理念理解はまず教職員の理解から。「理念はなぜ必要か」という問いに答えられない職員は多い。学生も職員も、その意識を共有する場が必要である。最低限、役職者は理解しなければならない。</li> </ul>

基準2 学校運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし</li> </ul>
基準3 教育活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員研修の機会が持てない様子がある。忙しいのか。 →一番の理由はマンパワー不足。自身の業務に加えて研修参加まで考える余裕がない。</li> <li>・最近の世代はワークライフバランス（仕事と生活の分離）と、ワークライフインテグレーション（仕事と生活の統合）に二極化しており、「仕事と生活を分けなければならない」という強迫観念が学びを阻害している。逆に、お金を払ってでも勉強したいという若者も多い。就業時間内に研修を終えられることが理想。</li> <li>・パワーポイントが使えない学生について。 職場としては厳しい。スマホタブレット等、受動的な使い方はできるが、能動的な使い方ができない世代。学校でプログラム教育を受けた世代に期待する。 今の学生は読むことが少なく、料理もパワーポイントも動画で学ぶ人が多いらしい。視覚優先の学びでは考えてできることもできなくなる。要約したものを見ることでは学びにならず、90分の授業にも耐えられないだろう。 →小学校実習でパワーポイントを使いこなせない学生の問題は、カリキュラムを前倒しにすることで実習時に実践できるよう対応した。</li> </ul>
基準4 学修成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「コロナの影響が大きかった」とあるが、タブレット貸与等、遠隔学習の選択肢は難しいのか。 →特に医療事務総合学科の検定科目は「見るだけ」では難しく、実践してみないと求める成果はあげられない。</li> <li>・退学者が急増しているが、「明確な理由がないまま退学する」とは。 →退学を決めた状態で初めて担任に打ち明けられるケースが多いが、「子どもが希望するならそれでいい」という保護者も多く、顔をみて説得しようにも学校に来たがらず話もしたがらない。コロナによる自宅待機期間からそのまま休みが続き学校に来なくなるケースもあった。1年次の退学者については、「実は他にやりたいことがある」という学生が多く、話を聞くと、高校時、将来性・安定性のない夢を教師や保護者に反対・説得されて保育の道を選んだものの、やはりモチベーションを保てず退学を決意したケースが多かった。</li> <li>・退学には個人要因と環境要因があるが、進路選択の段階で自</li> </ul>

	<p>己決定させていない環境が良くない。学修についていけないという個人要因なら学校が対処すべきだが、この場合は学校の責任ではない。他にやりたいことを見つけた学生がいた場合、他の道でも成果が挙げられそうな優秀な学生には背中を押すが、それが難しそうな学生にはセーフティネットとしての資格取得を勧める。しかし、保護者が子どもの言いなりではそれも難しい。自分で選択肢を見出せない学生に自己決定させることは更に難しいだろう。</p>
基準5 学生支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし</li> </ul>
基準6 教育環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室のブラインド等、設備の不備は学生の不満に繋がるため対処すべき。</li> <li>・防災についての取り組みはあるのか。</li> </ul> <p>→避難訓練、消火器を使用した防災訓練を実施した。</p>
基準7 学生の募集と受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の差別化が図りにくい、というのはその通りだと感じる。話題に挙げた地域貢献や社会貢献のボランティア活動などを行い、教育理念である「道義・礼節・作法」を絡めて、独自のキャッチコピーを作ってはどうか。</li> <li>・Google マップで検索すると口コミが3件しかない。内部からの声を集める動きも必要なのでは。口コミが増えれば検索上位に挙がってくる。</li> </ul>
基準8 財務	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし</li> </ul>
基準9 法令等の遵守	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし</li> </ul>
基準10 社会貢献・地域貢献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サステナブル、SDGs という言葉に代表されるように、これからの社会にボランティアは必要。利己ではない他己的行動はすべてボランティアである。今の若者はむしろ、フェアトレードなどにも意識が高い。「1 検索〇円」などもボランティア。無理なくやれるものから取り組めばいい。</li> <li>・他社貢献、ボランティアの喜びを伝えられる場面、ボランティア教育があることが理想。社会福祉法人に就職するなら尚更のこと、医療や福祉の分野は、他の業種よりもより関連が深い。教員がボランティア教育を行うことが難しければ、社会福祉協議会の職員に依頼すると良い。</li> </ul>

#### 4. 学校関係者評価の総括

今回の評価委員会では、今の若者の実態や性質について触れる場面が多くあった。

学びに対する欲求、活字を読み解く力、継続力、フットワークの軽さ等、若者の価値観や考え方を学校側がどう捉え、教育や就職の水準をどう維持していくのかという問題である。

若者の職業観の変化は、学生の学修意欲の低下にも関連する。高収入やキャリアアップを目指す層もいるが、生活時間を割いての努力を惜しむ若者は多い。当校の学生に置き換えても、資格・免許は欲しいが、その職業を目指す動機付けが弱く、学修へのモチベーションが保てなくなる学生が増えてきたように感じる。「道義・礼節・作法を身につけた人材の育成」という本校の理念に沿った教育活動を目指す前に、まずは学生に明確な将来のビジョンを持たせることが必要なのではないか。そのビジョンを目指すために身につけたい道義・礼節・作法、さらにその理念に基づいた社会貢献や地域活動、そういった結びつきが当校の特徴となるように体系化していくことが求められる。

そのためには、まず教職員全員が理念理解を深め、「その理念がなぜ必要か」という問いに答えられなければならない。